インド・プーナ留学記

ブラフマ・カマル

黙仙寺住職
明治大学文学部教授　阿部慈園

(一)

月明く　ブラフマ・カマル　神々と

満月の夜にだけ咲く花がある。日中は、その花弁をすぼめる。一見、蓮に似ている。プーナ(Poona,当地ではプネーPuṇe)の人々は「ブラフマ・カマル(Brahma-Kamala)」と呼ぶ。「梵の蓮(はちす)」とでも訳せようか。「梵」には、「宇宙の創造神」としての「ブラフマー(Brahmā,梵天)」という意味があるから、「梵天がくれた蓮」あるいは「梵天が咲かせた蓮」という意味を持つかもしれない。また、「梵」には、「清浄なもの」「神聖なもの」という意味もあるから、「清らかな蓮」「神々しい蓮」も可能な意味であろう。

純白にして、大輪。その直径は、二〇センチメートルくらい。花弁群は、花芯を二重、三重にとりかこみ、花弁の数は約二十五。鼻を寄せると、上品な芳香が鼻孔をくすぐる。

しかし、この花は蓮科に属する花ではない。

プーナにいた頃、葉の形がどうもサボテンに似ているから、ひょっとしたらサボテンの一種かもしれない、と思って、カナダ人の友だちに聞いてみたら、はたしてそうだった。帰国して、辞書『広辞苑』を開いてみると、サボテン科クジャクサボテン類の一種である（註2）という。事実、この花は、蓮のように水栽培ではなく、ほとんどが鉢植えだ。茎は平たく葉状。サボテンに似ている。ただし、トゲはない。北インド、クルクシェートラ(Kurukshetra)で見た深紅のバラも美事だったが、満月の光を浴びて、はんなりと咲くこの花は、神々しさすら覚えた。

日本では「月下美人」とこの花は、呼ばれている。誰が名づけたのか、不明であるが、言い得て妙である。諸橋哲次氏の『大漢和辞典』にも、この語は見当たらないから、漢語ではないらしい。恐らく、明治以後の成語であろうか。

新聞紙上で、一度だけこの花を見たことがあるが、夜咲いたかと思うと、すぐしぼんでしまうそうだ。『広辞苑』は、「四時間くらいしか咲いていない」という。インドでは、もう少し長いように思う。気候のせいであろうか。彼の地では、年一回だけ咲くのではなく、雨季のはじめの六月から、二、三カ月（花によっては数カ月）にわたって、次々と花をつける。この花は、サボテン科に属することからも、南方起源であろうか。

(二)

「ブラフマ・カマル」のほかに「クリシュナ・カマル(Krsna-Kamala)」も、好きな花の一つだ。「クリシュナ」は、梵天ブラフマーが創造した宇宙を維持する神「ヴィシュヌ(Visnu)」の化身の一つで、絵では、いつも横笛を手にし、紫黒色に描かれる。「クリシュナ」という語には「黒」「暗黒色」という意味があるから、この神

は白色系のアーリア人の神ではなく、肌の色がより黒い原住民（ドラヴィダ人など）が信奉していた神であろうと思われる。

この花は、紫紺色で、直径は一〇センチほどだ。花弁は六、七枚。昼間咲く。これも蓮科ではなく、つた科に属するようだ。花の色、大きさ、花のつき方が「紫鉄線」に似ている。つたかずらの類であろうか。いつだったか、V・V・ゴーカレー先生を訪ねた時、先生が、

「ミスター・アベ、これはクリシュナ・カマルというんだ。ハッハー」

と言いながら、この花を手わたしてくださったことがあった。「紫」は、インドでは「クリシュナの色」のような気がする。

「牛の国」インドは、また、「花の国」と言えるかもしれない。いろんな種類の花が咲き乱れ、年中、花の絶えることを知らない。日本では一鉢三千円もするブーゲンビリヤが、そこかしこに咲いている。赤に、黄に、白に。橙色のもあった。黒紫のもどこかで見たように記憶する。

道を歩く女の人が、垣根越しに咲く花の一枝を手折っても、一寸庭に足を踏み入れて、気に入った花の一つ、二つを摘んで、髪ぐしにさしても、だれも何にも言わない。大らかで、いいなあと思う。花が多いから、花が安い。十ルピー（約三百円）も出せば、バラが十本も手にくる。

インドの数多い、麗しい花々のうちで、ブラフマ・カマル、クリシュナ・カマルは、小生にとって「花中の花（puṣpānāṃ puṣpa）」だ。

㈢

「釈尊の国」インドと、私が関わりを持ってから七年の星霜が流れた。プーナ大学大学院のサンスクリット科に留学渡印したのが、一九七四年十一月。パーリ学の泰斗P・V・バパット博

士に就いて『清浄道論（Visuddhimagga）』に関する論文をまとめ、同大学に提出したのが、七九年三月。審査を経て、学位が授与されたのが、九カ月後の同年十二月八日。バンダルカル研究所からの論文出版のために、三度（みたび）渡印したのが八〇年三月。校正・若干の増補等で一カ年を費し、八一年二月二五日にやっと刊行を見た。

正味、四年半をインドに過ごしたことになる。少しく、インド人的になってしまったかもしれない。帰国後、思っていることを歯に衣着せず言ってしまう自分に、時々気づく。日本人どうし、それほど多くの言葉を費さなくとも、互いに察してしまう。ドナルド・キーン氏は、意味をあえて明確にしない、あいまいな表現がむしろ、日本語らしい日本語であるとさえいう。

しかし、インドでは、当地の人に対してのみならず、欧米人とつきあっていると、どうしても〝Yes〟、〝No〟がはっきりしてくる。また、

はっきりさせねばならない。〝No〟ならば、その理由を。また意見を求められたら、一応自分の確たるものを用意しておかねばならない。寡黙は決して美徳ではなく、あいまいは後で災いをもたらす。

インドへ何かを学びにくる欧米人には、ほとんどないことだが、それでも東洋人に対する優越感は潜在的には持っているようである。一度だけ、〝Jap〟と言われたことがあった。もちろん、すぐ〝Japanese〟と言い直したが。そんな彼らと、ほぼ対等につきあっていくには、自分の主張を見解をある程度明確に言えないと、なめられることがある。流暢でなくとも、自信を持って、相手の目をしっかり見つめ、迫力を持って語る。相手は「こいつは、自分の意見を持っているな」という目をする。

インドで行動する場合、英語が話せれば、それで十分ことたれるが、欧米人の留学生はほとんどが、インドの近代語の一つをマスターしようとする。仏教論理学を専門とするドイツ人の留学生が、マラーティー語を学んでいる。彼女は、

「インドの近代語のうち、一つでもできないと、恥だから」

と言う。日本からの留学生は反対に、そのほとんどがインドの原地語を学ぼうとしない。短期間の間に、専門分野のテクストをできるだけ読んだ方が得策であり、インドの近代語をたとえ勉強して帰国したとしても、それでメシが食えるわけではないからだ。

(四)

自分の論文が活字化されることの、恐(こわ)さと喜びを交互に感じながら、一年の月満ちて、私の処女作が世に出された。その間、校組で、バンダルカルのプレスのおやじと、しばしば口論し

た。私が若いせいもあり、おやじはすでに何十冊も校組しているから、自分独自の美学を著者である私に押しつけるのだ。二、三週間ゲラなしで、「どうしたのか」と思ってプレスに行くと、

「活字が底をついて、近日中に、ボンベイへ活字を買いに行く」

と言う。

出版費用のことで、事務局のボスともみあったこともあった。契約した費用より、さらに三、四割を要求したので、一時はインドで出版することを断念しようかと思ったほどだ。

二月二五日(一九八一年)、長年住み慣れた研究所ゲストハウスのメインホールで、出版記念パーティーが開かれた。七〇名ほどが来てくれた。お世話になった先生方、米・独・日・カナダ等からの留学生、研究所職員、それに下働きのピューンたち。インド人の奥さんになっている里子・ダムレーさんが、六器の生花を美しく生けて下さった。小さな日本が、来客の目をしばし酔わせた。インドティーとスナック、それにぶどう少々がふるまわれた。私の資力では、それがせいぜいであった。

先生方、友人たちはともかく、その種のパーティーには参加できないピューンたち(非バラモン階層)を、私は席に着けさせたかった。いつも彼らは、給仕をするか、隅の方に立って、飲み食いを見ているだけなのだ。そして、パーティーのあと、残り物を少しずつ分けあって食べている。私は、そんな彼らを一度パーティーに招待したかった。やせこけて、目ばかりギョロギョロしている彼らと同じテーブルに着いて、茶が飲みたかった。

パーティーは、七〇名が一堂に会することはなく、三回に分けてなされた。第一回目が、先生方と留学生たち、第二回目が、研究所職員及びプレスの連中。ピューンたちは、結局メイン

テーブルには着かなかった。しかし、サイドテーブルで、ビスケットをほおばりつつ茶を飲んでいた。研究所夜警のガンパット（マーリー＝花作師カースト）のほほのゆるみが、ぶどうの一房一房を口に運んでいた。ゲストハウスの鍵を預かるトプテー（農民カースト）のやさしい目が、今も思い出される。

一八〇ページの小著は、ババット先生に捧げられた。ココナッツとブーケ（グッチ）を添えて。八十七歳の老大学者に捧ぐには、拙いものであったが、先生は鳩のような目をなごませて受けて下さった。私の心には、七年の青春を燃やし尽くした、といういささかの感慨があった。ミセス・ババットには、オーランガバード・ショールとココナッツを手渡した。

グル（Guru, 師）は、弟子に、直接「法（dharma）」を教示するが、グルの夫人は、間接的に弟子の面倒を見る（例えば、お茶やお菓子等をふるまう）ので、学業が修了した時には、オーランガバード・ショール（三〇ルピーくらい）を奥様にプレゼントするのが、当地のならわしとされる。

奥様には、ずいぶんとかわいがって頂いた。帰国が近くなると、しきりに、

「何故、インド人の女の子を嫁にして日本へ連れて行かないのか」

と言われて、返答に困ったことがあった。十二歳の時、先生（当時二十歳）に嫁がれたので、英語を話されない。もっぱら、小生とマラーティー語でやりとりする。おかげで、小生のマラーティー語は、少しく上達した。

ショールとココナッツを手渡した時、夫人は、いささかの驚きと慈しみのまなざしで、私をじっと見つめてくれた。今年、満八十歳になられる。

(五)

「クリシュナル・カマル」の絵が入手できなくて、本の表紙のイラストは、「ブラフマ・カマル」にした。アメリカからのジム・レインを通して、カナダ人のアーティスト、ジャック・アンダースンに、そのイラストを頼んだ。彼は、一つ返事で「OK」してくれた。五つ六つの草案を描いてくれ、

「一つを選べ」

と言う。

「これ！」

と指したものが、彼自身一番気に入っていたものと一致した。汗顔ものの小著に、彼は「花」を添えてくれた。あとで、

「謝礼を払いたい」

と言っても、

「そんなものはいらない」

と言う。ひどくうれしかった。彼の奥さんはサンスクリット学者で、彼女のインド留学についてきたのだ。飄々乎として鶴のような男だった。

本の表紙の裏には、「渡水看花」の四文字を〝Over the Ocean, Seet he Flower〟の英訳を添えて、引用した。

註 (1)本稿は「梵の花びら」(『東海佛教』第二十七輯、昭和五十七年六月、東海印度学仏教学会)を改題、補筆訂正したものであることをおことわりする。

(2)『広辞苑』六九一ページ。